

令和元年6月5日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K00788

研究課題名(和文) 中古住宅ストックの改修・活用にみる日本的住様式の展開

研究課題名(英文) Development of Japanese living style seen from the repair and utilization of used housing stock

研究代表者

小伊藤 亜希子 (Koito, Akiko)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授

研究者番号：90257840

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大阪近代長屋の改修活用、及び中国の都市集合住宅と農村住宅の住み方調査により、コカ座を基本とする日本的住様式がいかに現代生活と融合し再生されているかを検証するものである。

については、新規入居者の住み方調査から、日本の伝統的空間特性が現代の新しいライフスタイルを選択する居住者の住み方の中で活かされていることを確認した。については、東北地域・吉林省と江南地域・蘇州市の都市住宅、及び、東北地域遼寧省のカンを持つ農村住宅の住み方調査を実施し、近代化が進む中国住宅の住空間構成と住様式の変化を、地域差もふまえて住生活の視点から捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の住様式について、起居様式や畳室の動向を個別に捉えた研究はこれまでもあるが、本研究の特徴は、現代住宅の詳細な住み方調査に基づいた住空間の変化を、伝統的住様式の再評価という視点から捉えようとする点である。さらに、こうした現象を、日本的住様式の海外波及という視点からその実態を把握し、国際比較を通じて、日本の住生活を再評価しようとするところに特徴がある。

本研究により、脱nLDKの新たな動きが始まっている現代日本の住宅を、歴史的発展のなかに位置づけながら、伝統的住様式を生かして、いかに新しい住様式を形成していくべきか、その展望が得られると期待できる。

研究成果の概要(英文)：This study is to verify the following items. How the Japanese living style based on the floor seating style is integrated with modern life and revived through the living survey on 1) renovating and utilizing Osaka modern Nagaya, and 2) Chinese urban condominium houses and rural houses.

As for (1), it was confirmed from the survey on the way of living of new residents in Osaka modern nagaya that characteristics of Japanese traditional space are utilized in the way of living of the residents who choose the new lifestyle.

As for (2), we investigated the way of living of urban houses in Jilin Province and Suzhou City in the Gangnam area, and also rural houses with kang in Liaoning Province, and considered the change of the living space composition of modernizing Chinese houses from the viewpoint of living style based on regional differences.

研究分野：住生活学

キーワード：大阪近代長屋 中国都市住宅 カンのある農村住宅 住み方 近代化 改修 日本的住様式 起居様式

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代における日本住宅の洋風化の歴史と現代における日本的住様式の再評価の諸相:

靴を脱いで家にかかる住様式をもつ国は、世界の中でもごく少数である。日本においては、明治以降に洋風化の波を受け、住生活もユカ座からイス座へと変化してきたが、今なお靴を脱ぐ住様式は揺らぐことなく維持され、フローリングの上であっても、ユカ座的な住様式が根付いている。一方、住宅の洋風化とイス座化は一定進み、畳室は確実に減少している。筆者らの調査では、日本人が畳室に対して持つイメージには「多用途に使える」「ごろごろできる」といったものが強いが、このイメージと実際の使い方にはズレが生じていることも明らかになってきた。そこで、我が国の住宅において、洋風化と伝統的住様式がどのように再融合していくのか、その瀬戸際にある現代において、日本的住様式の解明が求められている。

(2) ユカ座をはじめとした日本の住様式の海外波及:

日本的住様式であるくつを脱いで家にかかる住まい方は、近年世界の国々に広がっている。中でも中国においては、宋の時代以降、イス座と土足で家に入る住様式が歴史的に定着してきたが、住居水準の向上に伴い、ここ 20~30 年の間に住宅に床を張るようになり、上下足分離が進んでいる。現代の中国住宅は、洋風化、日本風化の波を受けて大きく変化途上にある。このように、海外の影響を同様に受けながら発展してきた日本と中国の住様式の変化過程を比較することにより、近代化の中で独自の住様式の形成をいかに図っていくのかという課題がより明確に位置づけられる。

2. 研究の目的

第一の目的は、現代日本の住生活におけるユカ座的生活様式の継承とその新たな展開について明らかにすることである。具体的には、主に戦前長屋等の中古住宅を対象に、住要求が明確に現れるリフォームに注目し、

- ① 既存住宅の空間を生かした連続的な室空間利用と住み方、
- ② 畳の位置づけをはじめとした床材の変化と現代の起居様式
- ③ 土間や中庭等の長屋のもつ伝統的空間特性の現代住生活での生かされ方をとらえる。

第二の目的は、日本特有の住様式であった靴脱ぎ様式の、中国における定着と、それによる住生活の変化を明らかにすることである。洋風化と日本風化の2つの波をうけ急激に発展している中国の住宅と住み方調査により、伝統的住様式と近代化住宅の融合過程を検証する。具体的には、東北地方、江南地方といった気候の異なる都市の共同住宅、及び農村住宅を対象とし、

- ① 家族の住み方と住空間構成の変化、
- ② 上下足履き替えによる住空間、及び起居様式の変化、
- ③ 日本風化、洋風化に対する居住者の住意識、

をとらえる。

3. 研究の方法

(1) 大阪戦前長屋の事例調査

概ね 2000 年以降に日本の伝統的空間の特徴を備えた大阪近代長屋を活用して新たに入居した事例のうち、店舗や事務所との併用住宅を含み、住居であるもの 18 件を調査対象とした。これらの訪問住み方調査を実施し、主に以下の項目の調査を行った。

- ① 入居時の改修内容の把握と、間取りの採取。
- ② 主な家具の配置や床材の調査
- ③ 現在の住み方の聞き取り

これら調査で得られたデータより、室の連続性や床面の広がりといった伝統的住空間の活かされ方に着目し、現代のライフスタイルに対応した日本的住様式がいかに再生されているかを分析した。

(2) 中国の東北地方（吉林市、長春市）と江南地方（蘇州市）の都市共同住宅、東北地方（鉄嶺市）の農村住宅調査

① アンケート調査

都市共同住宅と農村住宅を対象に、住生活に関するアンケート調査を実施した。都市共同住宅については、共同住宅建設が急速に拡大した 1980 年以降を建築年代により 3 分類した上で、その経年変化による住生活の発展について分析した。

- ② 住み方調査（東北地方共同住宅 15 件、江南地方共同住宅 12 件、東北地方農村住宅 10 件）アンケート結果を踏まえて、実例について訪問住み方調査を実施した。主な調査項目は、家族の住み方と住空間構成の変化、上下足履き替えによる住空間、及び起居様式の変化、日本風化、洋風化に対する居住者の住意識等である。

4. 研究成果

(1) 大阪近代長屋の活用事例にみる日本的住様式の展開

現代のライフスタイルに、伝統的空間の特徴を備えた長屋の伝統的空間がどのように対応し

ているかを検証した。長屋の持つ空間特性と住み方の関係として注目したのは、①土間空間をもつ間取りの使い方、②庭との関係、③連続性のある室空間の住み方、④床材の選択と起居様式である。

得られた結果を整理すると以下である。

- ① 住宅として住まわれている長屋においても、その多くは、様々な事業や社会的活動の場として利用されている。長屋居住者は、複数の仕事や活動を長屋の中で展開している。
- ② 土間の位置に着目した大阪近代長屋の間取りを4つの型に分類し（前土間型、通り庭+前土間型、前台所+玄関土間型、玄関土間型）、仕事や活動の場との関係を分析した。前者2つの前土間型は、併用住宅として利用するのに最適であり、土間空間は、店舗として、また地域のつながりの拠点になる空間として、新規居住者に活用されている。一方で、不特定多数を対象にした店舗等には適さない。後者2つの玄関土間型長屋においても、1階奥や2階が、アトリエや特定の人を対象とした医療・福祉系サービスを提供する活動の場として活発に活用されていた。
- ③ 長屋の空間的特徴である室の連続性は、すべての事例で引き継がれていた。1階の室の連続の仕方により、長屋空間を3つのタイプに分類し、その使われ方を分析した。室連続型では、建具の開閉により時間ごとに空間の分節を調整する使い方がみられ、特に併用住宅における生活空間と仕事場空間の切り替えに対応していた。建具を取り外して、一部あるいは全体を一室空間として使う、一室型や併用型も多くみられたが、ほとんどの長屋では、一室空間となった室と室の境界に既存の垂壁や袖壁を残す等により、一室化された空間のなかでも、これらを頼りに領域分けがされる、特徴的な住み方が多くみられた。居住人数も少なくなり、細かく室を分けるよりもゆるやかに連続させて広々と暮らしたいという現代の住要求に、長屋の空間は柔軟に対応しているといえる。
- ④ ほとんどの長屋で改修後も庭が残され、大切に設えられている。生活空間が、優先的に庭が見える位置に配置され、心地よい室内環境を作り出している。また飲食店の客席においても多くが庭を臨む位置に配置されることで、質の高い飲食空間の確保に成功している。
- ⑤ 新規入居者の住む長屋では、畳室は減少し、特に1階はフローリング化が進んでいることが分かった。一方で、起居様式については、食事空間はほぼイス座化しているが、くつろぐ空間においては、完全なイス座ではなく、ユカ座あるいは折衷座によってユカ面に近い起居様式が好まれている。寝る空間では、さらにユカ座の比率が高く、それは床材には関係なく、むしろ家族構成に既定されて選択されていた。



写真1 長屋における折衷座のくつろぎ空間

以上より、大阪近代長屋は、nLDK住宅の想定にとどまらない居住スタイル、すなわち、①標準家族外の少人数世帯構成、②一人で複数の仕事を掛け持ちする、③夫婦の場合もそれぞれが仕事や社会的活動を行う、④職住を分離せずに住宅をこれらの活動の場とする、を实践する人々に適応する住宅として、積極的に選択され活用されていることが分かった。

ほとんどの長屋で、入居時あるいは居住過程で一定の改修が行われていたが、庭、土間、室の連続性といった長屋の持つ特徴的な伝統的空間構成が引き継がれ、その利点を積極的に享受する住み方が展開されていた。

一方で、長屋の床上空間の標準であった畳室は大幅に減少しフローリングに変更されており、食事空間をはじめイス座化も進んでいた。しかし寝る空間やくつろぐ空間では、床材とは無関係に起居様式が選択され、特にくつろぐ空間においては、床面に近い折衷座とよぶべき起居様式が選択されていた。

洋風化を伴う近代化を経て、都市住宅のモデルチェンジがほぼ完了した現代においても、日本の伝統的住空間を持つ大阪近代長屋は現代の居住者によって有効に利用され、活用すべき住宅ストックとしてその価値を失っていない。むしろ、新しい居住スタイルを選択する人々の住要求に柔軟に適応し、わが国のこれからの住様式の展開を先行していることを示した。

この成果は、日本建築学会計画系論文集に掲載された。

(2) 中国の都市住宅の近代化と日本的住様式の展開

中国の東北地方（吉林市、長春市）と江南地方（蘇州市）の都市共同住宅を対象に、近代化が進む中国都市住宅の住空間構成と住様式の変化を、住生活の視点から捉えた。

- ① 東北地方の長春市と吉林市の共同住宅団地の調査からは、中国の都市住宅は、1980年代から1994年の住宅商品化政策を経て2000年代以降へと年代が新しくなるほど、質の向上と住戸規模の拡大とともに、小庁大臥（小さな公室と大きな寝室）から大庁小臥へ、さらに餐厅と客厅の2庁型プランが一般化していることが確認された。また上下足の履き替え様式の一般化と、それにとまなうユカ座生活も一部とらえられたが、大理石に代表される堅い床材は、ユカ座的住様式には馴染まず、ユカ座生活は限定的であることが分かった。

また、中国都市住宅の近代化を、洋風化、現代化、日本風化の3つの視点から考察し、日本風化としては、上下足履き替えに伴う玄関空間の出現や小上がりの畳室の流行が注目された。一方で、庁型住宅の間取りを基盤に、カンを起源とする小上がり空間や中国風のインテリアなども維持されており、中国都市住宅は、伝統的な住様式を引き継ぎつつ、海外の住様式の影響を強く受け、洋風化と日本風化を併い近代化していることを明らかにすることができた。

②江南地方の蘇州市の共同住宅団地の調査においても、住戸規模は100㎡を越え、3室2庁を中心として、餐厅と客厅の2庁型プランが一般化していることが確認された。住み方をみると、食事空間としての餐厅と、接客、団らん空間としての客厅の用途があいまいになり、1999年以前から2000年代、2010年代以降へと年代が新しくなるほど、両空間の一体化が進んでいることが確認された。一方で油煙が発生する調理方法のため、DKの一体化は見られない。

規模が拡大し設備も充実しているものの、客用寝室、書斎等に設定されている余裕室、浴槽や個室付属のトイレやシャワー、主寝室に必ず設置されている大型TVの使用頻度は低く、空間設備の近代化に住生活が追いついていない様子が見られた。一方で、物干しとくつろぎ空間を兼ねた南バルコニーと、サービスヤードとしての北のバルコニーの存在は、気候の穏やかな江南地区の共同住宅において、作業場として重要な役割を果たしていることも確認できた。

上下足の履き替え様式はほぼ定着し、新しい住宅ほど厳格化しているが、床暖房がない地区のため、東北地方に比べても床座の起居様式の浸透はない。しかし東北地方に比べて大理石よりフローリング床が好まれていることもあり、若い年齢層では部分的に床座の生活が見られた。

(3) 中国東北地方の農村住宅における近代化とユカ坐的住様式のルーツの探索

東北地方（鉄嶺市）の農村住宅調査では、床座的住様式の浸透とそのルーツを探った。

近代化が進んだ現在においても、中国東北部の農村には、「カン」と呼ばれる伝統的暖房設備を備えた住宅が広く分布している。カンと繋がる生活行為と季節ごとの住み方の違いに着目した調査から、以下のことが明らかになった。

- ①新しい暖房設備や調理器具の導入に伴い、カンやカマドの位置の変更、取り壊しが進んでいる。しかし全てを取り壊した事例はなく、今も使い続けられている。
- ②従来のカンは、食事・団欒・接客・就寝等の複合的な機能を持っていたが、一部の就寝機能を残して、多くの生活行為がカン上から機能分離し、専用の客厅(居間)、餐厅(食事室)、ベッドのある臥室(寝室)が形成される事例が散見された。
- ③農村住宅では履替えは進んでいないが、床暖房設置と室の機能分離が進んだ一部の住宅では履き替えが行われ、履き替え場所としての玄関空間が発生している。
- ④寒さの厳しい東北部では、夏はベッドで就寝し、餐厅で食事している、冬はカン上で生活行為が行われるというように、季節による住み方変化が見られた。

⑤年齢にかかわらず、住人はカンを今後も必要なものとして認識している。

以上により、生活の近代化が進む一方で、カンは、素足で過ごせる床上空間として、冬季に欠かせない暖房設備として使い続けられていることが明らかになり、特に東北地方の都市共同住宅で採用されている小上がり床座空間のルーツであることが示唆された。

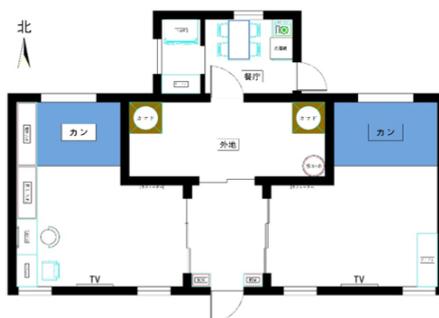


図1 餐厅が増築された農村住宅間取り



写真2 長春市共同住宅住戸の小上がり床座空間



写真3 蘇州市共同住宅住戸の入り口
玄関はないが履き替えが行われている



写真3 農村住宅のカン

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 行田夏希,小伊藤亜希子,小池志保子,藤田忍,綱本琴,中野茂夫: 改修を伴う大阪長屋の賃貸活用のしくみ -コーディネーターの役割に着目して-, 日本建築学会近畿支部研究報告集第59号計画系, 査読無, 2019.
- ② 藤田忍: 暮らしを開いてまちづくり オープンナガヤ大阪, 造景 2019, 査読無
- ③ 孫竹: 中国農村住宅の近代化と伝統 -東北地方のカンのある農村住宅調査から-, 住宅会議 106号, 査読無, 2019.6
- ④ 小伊藤亜希子,小池志保子,行田夏希, 峯崎瞳, 藤田忍: 新規入居者による大阪近代長屋の住み方 -オープンナガヤ大阪のネットワークを通じた事例から-, 日本建築学会計画系論文集, 査読有, 第83巻 第750号, pp.1381-1389, 2018.8
- ⑤ 峯崎瞳, 小池志保子, 行田夏希, 小伊藤亜希子, 藤田忍: 新規入居者による大阪型近代長屋の住まい方 -その1 平面構成に着目して-, 日本建築学会近畿支部研究報告集第57号計画系, 査読無, 2017.6.25, pp.77-80
- ⑥ 行田夏希, 小伊藤亜希子, 峯崎瞳, 小池志保子, 藤田忍: 新規入居者による大阪型近代長屋の住まい方 -その2 起居様式と特徴的空間の使い方に着目して-, 日本建築学会近畿支部研究報告集第57号計画系, 査読無, 2017.6.25, pp.81-84
- ⑦ 小池志保子, 小伊藤亜希子, 藤田忍: 近年の大阪近代長屋住宅の入居経緯・改修内容・住生活, 日本建築学会近畿支部研究報告集第56号計画系, 査読無, 2016.5.25

〔学会発表〕(計3件)

- ① 行田夏希,小伊藤亜希子,小池志保子,藤田忍,綱本琴,中野茂夫: 改修を伴う大阪長屋の賃貸活用のしくみ -コーディネーターの役割に着目して-, 日本建築学会大会学術講演梗概集
- ② 行田夏希, 小伊藤亜希子, 小池志保子, 峯崎瞳, 藤田忍: 新規入居者による大阪型近代長屋の住まい方 -続き間、土間、庭、ユカ座に着目して-, 日本家政学会関西支部第39回研究発表会, 研究発表要旨集 p.15, 2017.10.15, 同志社女子大学
- ③ 小池志保子, 小伊藤亜希子, 藤田忍: 近年の大阪近代長屋住宅のリノベーションと住生活, 日本建築学会大会, 日本建築学会大会(福岡大学) 発表番号5020 2016.8.26

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 藤田 忍

ローマ字氏名: FUJITA, Shinobu

所属研究機関名: 大阪市立大学

部局名: 大学院生活科学研究科

職名: 客員教授

研究者番号(8桁): 50190038

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 行田夏希

ローマ字氏名: YUKITA Natsuki

研究協力者氏名: 欒鈺

ローマ字氏名: LUAN Yu

研究協力者氏名: 肖宇星

ローマ字氏名: XIAO Yuxing

研究協力者氏名: 孫竹

ローマ字氏名: SUN Zhu

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。